

研究報告

**術後早期離床ケア OSCE のふりかえりをととしての
学生の学びと気づき**

Students' learning and discovery through the reflection conducted of Post-operative early ambulation care OSCE

安井大輔 小澤知子 濱田麻由美 川原理香 原田竜三

Daisuke YASUI, Tomoko OZAWA, Mayumi HAMADA, Rika KAWAHARA, Ryuzo HARADA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈研究報告〉

術後早期離床ケア OSCE のふりかえりをとおしての学生の学びと気づき

Students' learning and discovery through the reflection conducted of Post-operative early ambulation care OSCE

安井大輔 小澤知子 濱田麻由美 川原理香 原田竜三

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Daisuke YASUI, Tomoko OZAWA, Mayumi HAMADA, Rika KAWAHARA, Ryuzo HARADA

要 旨：術後早期離床ケア OSCE およびそのふりかえりをとおして学生がどのような学びや気づきを得たかを明らかにすることを目的として本研究を行った。研究方法は、OSCE を受けることにより、どのような学びがあったかについて学生を対象に半構成的面接を行い、質的帰納的に内容分析を行った。

結果、16 のサブカテゴリから6のカテゴリ【状況判断の必要性和困難感】【対象に合わせた看護実践の困難感】【情報共有の必要性和困難感】【基本的知識の活用方法および重要性】【自己の客観視】【広い視野の必要性】を抽出した。以上より、学生は術後ケア OSCE に取り組むことで、既習の知識を臨床実践にどのように活かすべきなのかを考えるよい機会となっていた。また、効果的なふりかえりを含めた OSCE を実施することは、自己の課題を明確にすることができ、今後の学びにつなげることができると考えられた。

キーワード：急性期看護、客観的臨床能力試験（OSCE）、判断、自己の課題、ふりかえり

Keywords：

1. はじめに

文部科学省は「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告（平成23年）」の中で、学士課程における看護実践能力の養成における課題を示している。すべての看護師等には、あらゆる場において看護ケアを提供できる能力や、チーム医療の調整役として、より高度なコミュニケーション能力が必要であると示したうえで、学士課程においては臨地実習における実施内容が制限される傾向が生じ、卒業時の看護実践能力の強化を課題として取り上げている¹⁾。臨地実習の制限により、実践能力の強化のためには実習時間や場所の見直しや教育内容の工夫が必要となり、そのような状況から客観的臨床能力試験（OSCE: Objective Structured Clinical Examination、以下 OSCE とする）が注目されるようになった。

OSCE は何度でも繰り返し練習でき、失敗の許される学習環境を設定することができるという特徴をもっている。看護ケアを提供するためには、アセスメント

に基づき臨床判断に基づいた看護援助を実施し、反応を捉え評価するという一連の臨床実践過程があるが、OSCE を活用することで臨地実習に近い学習環境を設けることが可能となるため、近年では導入する看護系教育機関も増えている。

本学の臨床看護学急性期領域においても、実践能力強化の一環として2010年度より、臨床実習に臨む直前の学内演習の一つとして、術後フィジカルアセスメントから異常を発見するシナリオを使用した OSCE を導入した²⁾。さらに2013年度には、臨床実習を終了した卒業期の4年生を対象に、取り組む内容の難易度を上げ、術後早期離床ケアのシナリオを使用した OSCE をアドバンスコースとして実施した。術後早期離床ケアの促進や中断においては、看護師がどのように関わるかが影響し、その看護師個々の判断に委ねられているのが現状である³⁾。また、本学の急性期看護実習においては、多くの学生が経験した技術でもある。そのため卒業期である4年生には、知識・技術・判断に基づき統合された実践の課題を明らかにする場面として

OSCEにふさわしいシナリオであると考えた。

これまでのOSCEに関する研究では、効果的に主体的学びを促すにはOSCEが有用である⁴⁾との報告や、模擬患者との相互作用の中で自己を客観的に見つめることができるため、臨床実習に向けての貴重な体験となる⁵⁾といったように、その有効性が明らかとなっている。しかし、OSCEの目的や方法は多様であり、授業設計によってはその学びや気づきも多様であると考えられた。そこで、本研究では術後早期離床ケアOSCEおよびそのふりかえりをおして学生がどのような学びや気づきを得たかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究目的

術後早期離床ケアOSCEをとおして学生がどのような学びや気づきを得たかを明らかにする。

3. 授業紹介 (OSCEの実際)

1) 科目におけるOSCEの目標

- ①主体的に取り組み、自己の課題を明確にできる。
- ②知識・技術・態度を統合させ、対象の術後フィジカルアセスメントができる。
- ③対象の術後状態について判断を伴う報告ができる。

2) OSCEの設計

本科目におけるOSCEとはオリエンテーションからふりかえり面接までをとおして行う学習プロセスとした。

(1)オリエンテーション

OSCEのシナリオ(表1)を提示し、内容に関する基礎知識の確認を各自で行うように説明した。また、OSCEの目的や準備、当日までの流れを説明し互いに共有した。

(2)シナリオ学習内容の共有

事前学習に関する基礎知識の共有を行い、看護アセスメント、問題抽出および計画立案をグループワークとして行った。

(3)シナリオに基づいた技術練習

OSCE実施日の前日に、事前学習した内容を基に各自で自己練習をする時間を2コマ設けた。使用する物品やベッド周りの環境はOSCE当日と同内容にセッティングした。またOSCEを実施する順番についても発表した。

(4)模擬患者の設定

模擬患者はシナリオに沿ってドレーン・チューブ類の装着、疑似術後創など臨床状況に近い状態でセッティングをした。

(5)当日の流れ

ブースを3つ設置し、全ブースが同時進行でOSCEを実施した。ブース前には必要な物品と必要ではない物品をテーブルに置き、OSCE開始直前に学生自身に物品を選んでもらうようにした。

学生は課題に取り組み、その観察およびアセスメントの結果から、離床できるか否かの判断を行い、離床可能であれば実際に離床を進め、不可能と判断した場合には離床を行わないこととした。

実施時間は計25分であり、そのうち実施が22分、報告を3分以内と定めている。時間内に終了しない場合には、評価者が実施の中止を告げ、実施した範囲内での報告を行う。報告の内容については、簡潔に情報を統合してアセスメントを加え、どのような援助が必要かを報告する。

3) 実施後のふりかえりの方法

学生は実施直後にふりかえりシート(表2)に自己のふりかえりを記入した。教員と模擬患者は学生の評価およびフィードバック内容を共有した。その後、教員と学生が個別面接によりフィードバックおよび自己評価から課題を整理した。

4. 研究方法

1) 研究デザイン: 質的帰納的研究

2) 研究対象者: A大学4年生のうちOSCEを受講し、研究協力の承諾が得られた者9名。

3) 研究期間: 平成25年8月から平成26年3月

4) 研究方法

(1)データの収集方法

- ①研究協力の承諾が得られた対象者が来校している日に、本研究者が対象者へ個別に連絡を取り、都合の良い日程を確認しインタビューを実施した。
- ②インタビューは、対象者のふりかえり(教員1名対学生1名の個別面接)を担当した者は行わず、それ以外の本研究者が実施した。
- ③インタビューは30分程度を予定し、その内容はICレコーダに録音した。調査内容は、OSCEを経験することでどのような学びや気づきがあったかについてである。また、インタビューは半構成的に実施した。

(2)分析方法

インタビューにより収集したデータはICレコーダに録音し内容を逐語録としてテキスト化した。テキストデータからは、OSCEを経験することで学んだことや気づいたことに着目して内容を抽出した。抽出したデータは記録単位・文脈単位に分割してコ

表 1 OSCE シナリオ

54 歳男性、10 年ほど前からアルコール性の肝機能低下を指摘されていたが放置していた。数日前から疲労感が強くなり黄疸も出現したため病院を受診し、諸検査の結果、肝臓がんと診断され、手術目的で入院となった。本人は「痛いのが嫌だから、痛み止めをどんどん使ってほしい」と話している。

手術は全身麻酔下で、肝臓部分切除術を実施。肝臓切離部とウインスロー孔にドレーンが各 1 本ずつ、胆のうも併せて切除したため、胆管ドレーンを留置。2 リットルの酸素投与（ネーザル）がされている。鼻腔より胃チューブ、左前腕に点滴静脈注射ライン、膀胱留置カテーテル、硬膜外カテーテル（2%キシロカイン、レペタン持続注入）が挿入されている。

< 情報 >

・ 基本情報

身長 166cm、体重 76kg 腹囲 86cm 独身で一人暮らし

喫煙歴 40 本/日（34 年間） 飲酒歴 ビール 1 缶（350mL）、日本酒 3 合/日（ほぼ毎日）

排便 3 日に 1 回 排尿 8 回/日

・ 手術概要

手術時間：5 時間 00 分 麻酔時間：6 時間

輸液量：2860mL（うち輸血量 400mL） 出血量：1040 g 排尿量 560mL

< 術直後のデータ >

TP 2.9 g/dL Alb 1.7g/dL RBC $340 \times 10^4 / \mu\text{L}$ WBC 7800 / μL

Hb 10.8g/dL Hct 32% PLT 23 万 μL CRP 0.5 mg/dL

Na 148mEq/L Cl 4.0mEq/L K 5.1 mEq/L APTT 45sec

GOT 84IU/L GPT 88IU/L γ -GTP 150 IU/L T-Bil 1.8mg/dL

NH_4^+ $52 \mu\text{g/dL}$ HbA1c 6.1%

< 課題 >

現在、術後 1 日目で、午前 9 時 30 分である。朝 6 時に酸素は off になり、胃管も抜去された。創痛は自制内である。

午前 10 時に初回の離床を行う予定であり、実施の可否についてアセスメントし、可能ならば離床を行ってください。

ード化を行った。コード化したものの抽象化を確認しながら内容コード一覧を作成した。内容コードの意味内容および類似性を検討しながら、サブカテゴリー、カテゴリーを形成した。また、分析のプロセスにおいてできる限り客観性が保たれるよう複数名

の研究者で検討しながら行った。

5. 倫理的配慮

対象者への募集や研究説明にあたっては、OSCEを

表2 ふりかえりシート

年 月 日 ()

学籍 No. :

氏名 :

① OSCE を実施してどのように感じましたか？	
② 上手くできたことは何ですか？	
③ 改善したいことは何ですか？	
④ OSCE を体験することで学んだことは何ですか？	
⑤ 学びを活かして、改善したいことはこれからどのように取り組もうと思いますか？	
⑥ (面接終了後) 教員との面接で気づいたことを記載してください。	

実施する科目の授業が終了し、学生成績通知がなされた後に実施した。また、インタビュアーは対象者のふりかえり（教員1名対学生1名の個別面接）を担当した者は行わず、それ以外の本研究者が実施した。

研究の説明は、対象者が集合する時間に研究の目的、意義、方法、成績には一切影響されないこと、研究参加の自由意思の尊重と不参加でも不利益のないことの保証、目的外のデータ使用はしないこと、同意をしてもいつでも撤回できること、データの保管管理方法、研究結果は論文や学会報告とすること、研究方法、連絡先について口頭と文書にて実施した。

インタビューについては、ICレコーダによる録音および書面記録をすること、使用した録音および記録はデータコード化し対象者の匿名性を守ること、パスワード保護したパソコンを使用すること、インタビューの途中で辞退できること、研究終了後のデータはすべて消去することについても口頭と文書で説明をした。また、同意書は、調査当日に持参していただき、それまでに参加を撤回することも可能とした。

本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委

員会の承認を受け実施した。

6. 結 果

手順に従い分析した結果、83のコードから、16のサブカテゴリーを抽出し、さらに6つのカテゴリーを生成した（表3）。以後、カテゴリーを【 】で示し、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で示す。

1) 【状況判断の必要性和困難感】

【状況判断の必要性和困難感】は看護実践場面では状況判断が必要となることを再認識しつつ、同時に難しさを感じることがあったという学びを示すカテゴリーであり、<患者に合わせた判断が難しい><判断に責任を感じる><判断によりケアが変わる>の3つのサブカテゴリーから生成した。

学生は「患者さんに合わせた判断、情報収集の難しさや大切さを感じた」「優先度が人によって違ったりもするっていうのがわかった」など<患者に合わせた判断が難しい>ことや、「その場にいるのは看護師と患者であり、判断の責任は看護師にある」といったよ

表3 術後早期離床ケア OSCE のふりかえりをとおしての学び

カテゴリー (6)	サブカテゴリー (16)
状況判断の必要性和困難感	患者に合わせた判断が難しい
	判断に責任を感じる
	判断によりケアが変わる
対象に合わせた看護実践の困難感	相手に合わせることが難しい
情報共有の必要性和困難感	情報共有が大切である
	根拠となる考えを共有することが大切である
	思考を伝えることが難しい
	根拠を説明しなければならない
基本的知識の活用方法および重要性	行為に根拠をもたなければならない
	正確なアセスメントが大切である
	知識の活用方法がわかった
自己の客観視	自分の評価ができた
	危機感を持った
	想定外の状況に戸惑いがあった
広い視野の必要性	予測したうえでの行動が必要である
	広い視野が必要である

うに＜判断に責任を感じる＞こと、「その看護師ひとりの判断・解釈によって患者へのケアが変わる」「プライバシーの保護とかも自分が急ぐってほうを優先してしまった」など＜判断によりケアが変わる＞などを学んでいた。

2) 【対象に合わせた看護実践の困難感】

【対象に合わせた看護実践の困難感】はOSCEの特徴である、実際に対象（模擬患者）が存在する中で、看護を実践する難しさを感じたことを示すカテゴリーである。

＜相手に合わせることが難しい＞という1つのサブカテゴリーから生成した。「人形相手とかじゃなくて、しっかり人であるということで会話しながらやるっていうのが難しかった」といったように＜相手に合わせることが難しい＞ことを感じていた。

3) 【情報共有の必要性和困難感】

【情報共有の必要性和困難感】は評価者への報告や患者への説明をとおして、情報を他者と共有することの必要性を感じることに、その難しさを示すカテゴリーであり、＜情報共有が大切である＞＜根拠となる考えを共有することが大切である＞＜思考を伝えることが難しい＞＜根拠を説明しなければならない＞の4つのサブカテゴリーから生成した。「看護とか医療っていうのはチームでやるものであり情報の共有はすごい大切である」や「結果を共有することが重要」など＜情報共有が大切である＞との認識や、「先輩へ報告する際に判断の根拠となることを伝え、考えを共有することが大切である」「何かの機序がないと現象は起きないため、情報を受け取る側は、なぜそう判断したのかを聴くのだと感じた」などのように＜根拠となる考えを共有することが大切である＞ということを感じていた。「曖昧な表現であったのは自分の頭の中でしっかり整理して言葉にすることが必要である」「患者へ問診する場合は、具体的な解答が得られるような質問が大事だと感じた」といったように＜思考を伝えることが難しい＞こと、「患者にケアを行うことの効果を伝えてあげれば良かった」「患者さんへの説明が言葉足らずだった」ことから＜根拠を説明しなければならない＞ことを学んでいた。

4) 【基本的知識の活用方法および重要性】

【基本的知識の活用方法および重要性】は既習の知識を実践場面でどのように活用したらよいのか、また知識を増やすことの重要性について学んだことを示すカテゴリーである。

＜行為に根拠をもたなければならない＞＜正確なアセスメントが大切である＞＜知識の活用方法がわかった＞という3つのサブカテゴリーから生成した。「これ

から臨床経験する中で、常に根拠を考えることが大切と感じた」「根拠をもっとひとつひとつ自分で理解しながらやるのが大切」など＜行為に根拠をもたなければならない＞と感じ、「情報からアセスメントを正確に行うということは大切」から＜正確なアセスメントが大切である＞、「今までバラバラだった知識を集めて、実践に活かす」「知識を活かすような看護を学ぶことができる」から＜知識の活用方法がわかった＞といった学びを得ていた。

5) 【自己の客観視】

【自己の客観視】とはOSCEのふりかえりにより他者からフィードバックと自己の評価を突き合わせ客観的に自己を洞察する学びを示すカテゴリーである。＜自分の評価ができた＞＜危機感を持った＞＜想定外の状況に戸惑いがあった＞という3つのサブカテゴリーから生成した。「自分を見つめなおす機会になった」「自身に関しての気づきが多かった」から＜自分の評価ができた＞と示し、「勉強しても実際にやってみるとできないし、そういう自分を知れてすごい焦ったというか危機感を持った」から＜危機感を持った＞、「自分の予定とは違うことを言われたときにすごい戸惑う」「予測してなかったことが起きると自分が体験しなかったこととかが起ると、やっぱりちょっと戸惑った」から＜想定外の状況に戸惑いがあった＞と感じていた。

6) 【広い視野の必要性】

【広い視野の必要性】はOSCEによって導き出された今後の課題を示すカテゴリーとなっている。＜予測したうえでの行動が必要である＞＜広い視野が必要である＞という2つのサブカテゴリーから生成された。「ひとつひとつ教科書の流れどおりじゃなくて、自分でこれを動かしたらどうなるかっていうのをひとつひとつ予測しなきゃいけないっていうのが、やって気付いた」「次の行動を頭で考えながら行動しなきゃいけない」などから＜予測したうえでの行動が必要である＞と感じ、「一点に集中ではなく広い視野でゆとりをもってって落ち着いてやっていきたい」「部分部分の結果ばかりで、患者の状態を統合して考えることが必要」から＜広い視野が必要である＞と学んでいた。

7. 考 察

1) OSCEの意義と照らし合わせた学生の学び

大森らはOSCEを行うことで、その特徴から臨床に近い形で実践を経験することで自信が生まれ、かつ、獲得した技術を臨床実習に役立てられたと報告している⁷⁾。本研究の結果から、術後ケアOSCEをとおしての

学びとして、状況判断や情報共有のもとに、対象に合わせた看護を既習の知識を活用しながら実践していたと考えられる。これらは臨地実習においては日常的に体験することではあるが、通常の学内講義では体験することは難しく、仮に演習科目であったとしても技術のタスクトレーニングのみでは得られない学びであると考えられる。また、看護教育におけるOSCEの意義として、知識や理解の確認（認知領域）だけではなく、技術や実践のプロセス（精神運動領域）、実践時の態度やマナー、習慣（情意領域）などの評価が可能であることが挙げられる⁶⁾。今回、実施した術後ケアOSCEのふりかえりからも、学生は認知領域である【基本的知識の活用方法および重要性】に気づき、精神運動領域である【状況判断の必要性和困難感】【対象に合わせた看護実践の困難感】【情報共有の必要性和困難感】と向き合いながら、【客観的に自己評価できる機会】【広い視野の必要性】などの情意領域の学びを得ることができていた。このような学びの内容から、OSCE本来の意義・目的は達成できていたと考えられる。

2) ふりかえりをとおした客観的自己評価

一般的なOSCEにおいては、実施後のふりかえりとして模擬患者および評価者によるフィードバックがなされる。しかしながら、評価の視点を統一しなければ学生間で評価のばらつきが発生し、適正な評価ができない可能性がある。現に、先行研究においては教員のフィードバック内容への不満が明らかとなっている⁵⁾。そこで、本研究のOSCEでは評価者のフィードバックを主とするのではなく、教員1名対学生1名でふりかえり面接を用いて、学生自身に評価をしてもらうように促しながら実施することで、「気づき」を促した。その結果「勉強しても実際にやってみるとできない」「すごい焦ったという危機感を持った」など適切な看護が提供できるかどうか自分自身への危機感が現れることや、「予測してなかったことが起きる」「自分が体験しなかったこととかが起る」など想定外の状況が発生した場合には戸惑ってしまう自分がいることに気づくことができていた。また、幅広い視野をもつ必要性を認識していることから、自分自身で課題を見出すことができたと考えられる。

統合的な実践能力を育成するためには自己を適正に理解できる能力が大切である。効果的なふりかえりを含めたOSCEを実施することは、客観的に自分を見つめ直すよい機会を提供することにつながっていた。評価者からの助言だけではなく、自分自身で自己の課題を明確にすることができ、今後の学びにつなげることができると考えられる。

3) 既習の知識の統合

OSCEは自己を客観視するよい機会となっていることは先述の通りである。様々な気づきがあり、今後の課題を見出すことに繋がっているわけだが、事前学習および練習、そしてOSCE本番というプロセスの中で、看護実践場面ではこれまでに学んできた多くの知識が基盤として必要であることに気づき、また知識を統合する必要性についても考えていることが明らかとなった。本研究の対象者に実施したOSCEの場合にはタスクトレーニングとは異なり、実際の現場と同じような環境下での看護実践、基本的知識に基づいた思考（アセスメント）や行動が求められるために、知識を統合させなければいけない状況が作り出されたと考えられる。「行為に根拠をもたなければならない」というサブカテゴリーが示すように、多くの学生は「何のために行うのか」ということを強く意識していたことが伺え、的確な根拠を示すためには様々な既習の知識を統合させる必要があることに気付いた結果であると考えた。また、それらが不十分であった場合、状況判断を迫られた時に困難感を感じるようになったと推測される。

4) 学生の学びを促すシナリオの意義

実際の臨床の場において看護ケアを提供するためには、アセスメント結果からの臨床判断に基づいた看護援助を実施し、反応を捉え評価するという一連の臨床実践過程がある。よって、実践能力の強化を図るには、単一のタスクトレーニングで終わるようなシナリオではなく、知識・技術・判断に基づき統合された実践の課題を明らかにするような対象の存在がある状況設定とした。これにより双方向性のあるリアリティーな状況設定となり、相手の反応を捉えてどうするかを判断する必要性が求められる。その効果として、学生達は看護実践場面では既習の知識が基盤として必要であることに気づき、主体的な学習姿勢を構築することに繋がったと考える。

学生が得た学びの分析から、OSCEの目的を達成するためにはシナリオ設定が大きく影響することを再確認することができた。加えて、シナリオ設定に際しては、対象とする学生のレディネスや実践における課題を十分に把握し、見合った難易度で事例および課題を設定することで、より学びを深められると示唆された。

8. まとめ

本研究の結果から、以下のような結論が得られた。

- ① OSCEのような、実際の臨床現場・場面を再現した学習環境の中で看護実践を行うことで、臨地実習と同じように精神運動領域や情意領域の学びを得るこ

とができていた。

②効果的なふりかえりを含めたOSCEにより、客観的に自分を見つめ直す機会となり、自分自身で自己の課題を明確にすることができていた。

③OSCEを受けるプロセスの中で、看護実践場面ではこれまでに学んできた多くの知識が基盤として必要であることに気づき、また知識を統合する必要性についても考えていた。また、OSCEは「試験」であり、「試験」を課すことで学生たちが積極的に学習する姿勢をつくっていた。

④学生の学びを促すシナリオの意義

看護技術の単純なタスクトレーニングではなく、知識・技術・判断に基づき統合された実践の課題を明らかにするようリアルティのある状況設定シナリオを作ることが、学生の主体的な学びを促すことにつながる可能性が示唆された。

9. 研究の限界

本研究は1施設のみの学生を対象としたため、本研究で得られた結果を一般化するには限界があると考えられる。今後はOSCEを実施している複数施設においての調査等により、一般化の可能性を高める必要がある。

10. 謝 辞

本研究にご協力頂いた学生の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は平成25年度東京医療保健大学特別研究費の助成を受けて行った研究の一部となっています。

引用文献

- 1) 文部科学省. 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会最終報. 2011.
- 2) 原田竜三. フィジカルアセスメントのOSCE導入による臨地実習の効果. 看護人材教育 2012. 9巻2号: 71-75.
- 3) 小澤知子. 術後の早期離床援助における看護師を対象とした研究の動向と課題. 東京医療保健大学紀要 2013. 7巻1号: 11-17.
- 4) 庄村雅子, 佐藤幹代, 高橋奈津子他. 成人看護学におけるOSCE (Objective Structured Clinical Examination) を活用した看護技術の主体的習得に関する学び. 東海大学健康科
- 5) 学部紀要2008. 第14号: 39-45.
- 6) 5) 矢野理香. フィジカルアセスメントの模擬患者演習における学生の学び. 天使大学紀要
- 7) 2003. 3号: 1-11.
- 8) 中村恵子. OSCEの概要と看護教育における意義. 看護展望 2011; 36巻6号: 4-8.
- 9) 大森真澄, 矢田昭子, 三瓶まり他. 試行的実践から明らかとなった看護学生に対するOSCEの意義と課題. 島根大学医学部紀要 2011; 34巻: 59-64.